

北朝鮮の社会政治的生命体論について

姜 海日 (JIANG Hairi、じゃん・はいり) *

私は修士課程のときは主に儒教思想の基礎ともいべき「孝」思想に関心を持っていた。もともとは家族内部の倫理観念として役割を果たすものと単純にとらえていたが、勉強を進めることによって、「孝」思想の持つ政治的側面を知ることになり、それがいかに政治支配に運用されていたかについて、興味をもつようになった。一方、東アジアにおいてかなり独特な国家である北朝鮮の資料で頻繁に出回っている首領様への「忠誠」と「孝誠」などの言葉に注目し、その内在的論理を解明することを「孝」思想の目線から捉えようと思い、修士論文を書き始めたのである。

論文の要点を簡単に整理すると、まずは儒教思想において、「孝」思想の本質に関する理解を「生」と「死」といった二つの軸から理解を深めた。「生」の角度からは、子は自分の生命を授けてもらった親を究極的な根源と見なし、そこへの絶対的服従ということがまさに共同体を構築する秩序の究極的な根源であるとみなし、「死」の角度からは、人間の死に対する恐怖感が人間にとっては根本的な感情であり、その恐怖はまさに子の親への祭祀などの儀礼によって、「生命」の永続を感じ取り、克服されたということである。¹一方、北朝鮮で1986年に提出された「社会政治的生命体」論においては、人間の生命を肉体的生命と社会政治的生命という二つの次元に分け、社会政治的生命を肉体的生命よりも高い次元に置いたのである。それで、肉体的生命は親から授けられるが、社会政治的生命は首領から授けられ、人間は「社会政治的生命体」の一員として、「永生」することができると言われている、これを実現するために、北朝鮮では全人民を一つの巨大な「革命的家族」として再構築し、金日成は単なる支配者でなく、朝鮮人民の父なる首領として「君臨」したのである。しかもかかる支配を可能にしたのは言うまでもなく、儒教的メンタリティが北朝鮮民衆の思想に深く潜んでいるからこそ可能だと結論付けた。

今の時点から見ると、それはあまりにも単純な考えであり、支配構造の正確な把握においてはなによりも、北朝鮮民衆の自己認識と緊密につながっている問題であるため、現在では北朝鮮の支配層は人民の生命をいかに定義し、民衆は自ら生命をどう認識しているかということに焦点をあてて研究を進めている。

周知のように、1990年代を前後として、東欧社会主義国家圏やソ連の崩壊と、首領である金日成の死去、自然災害に伴う深刻な食糧危機のため、北朝鮮はほぼ壊滅寸前であった。それにも関わらず、北朝鮮の政権は現在も存続し、2012年には金正恩への権力継承も行われた。地政学的な考慮から北朝鮮への支援を惜しまなかった中国の影響は言うまでもないが、ただの物質的支援と強権力で済むとは思えない。それで、1990-2000年の中で、北朝鮮の国家イデオロギーはどのように作用していたかを明らかにしようとするのが研究の目的ともいえよう。

* 京都大学大学院人間・環境学研究科 博士後期課程。

¹ 生と死からの「孝」思想解釈についてはそれぞれ池澤優と加地伸行の説を参考にした。

今の研究資料としては主に北朝鮮労働党の機関紙である「労働新聞」を利用している。権力支配の正当性に対する宣伝を主な目的とする「労働新聞」記事のすべてが事実そのものだとはとても思えないが、社説や正論などの文章を通じて、その政治支配の作動原理を垣間見するためにはきわめて重要な資料だともいえる。言い換えれば文章の真偽よりも裏の思想的回路が大切である。

今後は儒教的側面だけでなく、より多元的な視点からその生命の本質を見つめるつもりである。たとえば戦前日本で宣揚された「歴史的生命」の考え方やキリスト教的な生命観も参照すべき多と思う。一言でいえば、最終的にたどり着くべきところはより立体的な北朝鮮の生命観理解だともいえる。